

教養科目における 西洋音楽史・民族音楽学・日本音楽史の相乗効果[†]

武内恵美子*

秋田大学教育文化学部

本論は、教養科目で1授業の中で西洋音楽史と民族音楽学の両方を扱うことで生じる学習意欲の相乗効果、およびそれが日本音楽史の学習にどのように影響するのかを検討したものである。

筆者は教養科目において、芸術と文化Ⅰ、芸術緒文化Ⅱという音楽の科目を担当している。当該授業において、芸術と文化Ⅰでは日本音楽史を、芸術と文化Ⅱでは西洋音楽史と民族音楽学を扱っている。通年で日本音楽史・西洋音楽史・民族音楽学が学べるように設定している。1授業内で西洋音楽史と民族音楽学を扱うことは稀であるため、受講生への質問紙調査に基づき統計分析によってその効果について考察した。

その結果、1授業内で西洋音楽史と民族音楽学を学ぶことで、学生は相乗効果を感じていることが明らかになった。さらに、それにより、教師側からの意識付けがなくても日本音楽史に対する関心や学習意欲が高まることが判明した。

キーワード：教養科目、西洋音楽史、民族音楽学、日本音楽史

はじめに

筆者は秋田大学の教養基礎教育において「芸術と文化Ⅱ」¹という授業名で音楽に関する授業を行っている。いわゆる大学の一般教養科目に属するものである。筆者は当該授業で、西洋音楽史²と民族音楽学³を組み合わせた内容を展開している。教養科目で音楽の授業を行うことは珍しいことではないが、一般的には西洋音楽史・民族音楽学・日本音楽史等、音楽学分野における音楽史または音楽文化の1種類を扱い、1つの授業の中でそれらを組み合わせて展開することは、オムニバスとして複数の教員が携わる形でならあり得るが、1人の教員で構成することはおそらくあまりないのではないかと推測する⁴。

筆者は前期に「芸術と文化Ⅰ」において日本音楽史⁵を、後期に「芸術と文化Ⅱ」において西洋音楽史と民族音楽学を扱っている。それぞれ半期15回の授業である。授業は分割されているが、1年を通して両授業を受講することで、日本音楽史・西洋音楽史・民族音楽学（諸民族の音楽文化）の各分野の概略を学べるように設定している。

両授業ともに出席表にコメント欄（以後コメントシートと表記）を設け、感想・意見・質問等の記入をさせている。数年来この形式で授業を実施してきた過程で、受講学生によるコメントシートの記述が、西洋音楽史や民族音楽学等、あるいはその内容について等、ひとつの単元やジャンルにとらわれないような視野の広がりを感じられる内容が散見されるようになった。そこで、第一に、1授業の中で西洋音楽史と民族音楽学の両立をすることでどのような認識が生じているのか、第二に1年を通して日本音楽史・西洋音楽史・民族音楽学の授業を行うことで、どのような相乗効果が見られるのかについて検討し考察を試みることにした。

2013年2月15日受理

[†] The synergistic effect of the history of Western music, ethnomusicology, and the history of Japanese music in liberal arts education.

*Emiko TAKENOUCHI, Faculty of Education and Human Studies, Akita University

教養教育における音楽に関する論文としては、西江秀三の「音楽をかたるなどとは～教養教育としての音楽～」⁶、同じく西江秀三の「モーツァルトなんて言っただけで～教養教育としての音楽～」⁷、小島千かの「大学の教養教育における「音楽」と「美術」の連携－音楽の視覚化を中心に－」⁸等があるが、少数である。また、内容的には、西江の論考は西洋音楽史の1ジャンルを扱っているものであり、西洋音楽史以外との組み合わせ等を検討したものではない。一方、小島の研究は美術との連携という、複合教科の考察であり、その視点は大変興味深い。音楽ジャンルにおける複合というものではない。以上のことから、本論で問題とする音楽分野内の複数ジャンルを扱う場合の相乗効果についての先行研究は管見に入らなかった。本論では、これまで研究されていない音楽ジャンルの相乗効果について考察を行っていくことにする。

1. 授業概要

先述の通り、筆者が担当している科目は「芸術と文化Ⅰ」および「芸術と文化Ⅱ」の2科目である。「芸術と文化Ⅰ」は日本の音楽文化と副題を付けているように日本音楽史概説であり、15回で古代から現代に至る日本音楽の概要を辿る内容である。現存している音楽文化のみならず、すでに廃れてしまった音楽についても扱っている。「芸術と文化Ⅱ」は世界の音楽文化と副題を付けており、西洋音楽史と民族音楽学の概説を15回の中で扱う。内訳は1～8回までが西洋音楽史で、古代ギリシャから、中世・ルネサンス・バロック・近代（古典派・ロマン派）・ポストロマン派・現代の、いわゆる西洋の芸術音楽（クラシック音楽）の歴史を辿り、9～15回が民族音楽学概論として、「世界の音楽を学ぶために」という導入の講義の後、東南アジア・南アジア・西アジア・アフリカ・ヨーロッパの民族音楽・南北アメリカ・オセアニア・東アジアの各地域の特徴的な音楽文化の概要を事例として扱っている。

授業の目的は「現在世界の音楽文化の基準となっている西洋音楽の歴史と、世界の音楽を学ぶことによって、国際的な視野に立った音楽文化の判断ができるようになることを目指す。」であり、到達目標は「世界の代表的な音楽文化の特徴を理解し聞き分けることができるようになる。また音楽文化を優劣なく判断・評価できるようになる。」としている。

カリキュラム上の位置づけとしては「世界中の音楽についての知識を幅広く身に付けることで教養としての音楽と柔軟な姿勢と判断能力を培う。」としている。

一般的には、先述の通り、西洋音楽史のみ、あるいは民族音楽学入門として諸民族の音楽を、それぞれ個別に扱う方法が採られる。しかし筆者は、教養教育の一環として音楽を扱う際に、日本と西洋という地域だけでは世界の音楽を学んだことにならないこと、また、民族音楽学を扱わないことで、普段聞き慣れない諸民族の音楽に対する姿勢を養えない状態のまま教養教育を終えることは好ましいことではないと考えた。しかし、もう1科目を設置することは難しいため、西洋音楽史と民族音楽学を同一科目内で学ぶという授業を設定した。

世界の音楽については、高校までの段階で多少は学習しているが、時数や教材等様々な要因から、体系的に学習していることが一般的であるとは想定できない。また、現在の日本の音楽文化や教育環境では、諸民族の音楽といっても西洋音楽に形態が相似している比較的聞きやすい音楽が好まれ、自分たちの認識概念から大きく外れる音楽について正当な評価ができない、あるいは判断基準を持たない学生が多いのではないかと考える。したがって、初回のガイダンス時に「世界の音楽を学ぶために」として、音楽のとらえ方、諸民族の音楽に対する姿勢についての概要を講義し、何故西洋音楽史と民族音楽学を学ぶべきなのかということを説明している。

当該授業は全学開講であり、筆者所属の教育文化学部のみならず、工学資源学部、医学部の学生も受講している。ただし、今回の研究の対象とした平成24年度後期開講の「芸術と文化Ⅱ」は教育文化学部および工学資源学部の学生のみ受講し、医学部の学生は受講していない。

2. 調査の概要

本研究のために、「芸術と文化Ⅱ」受講者に対し、無記名による質問紙調査を実施した。本調査に先立ち、質問紙の内容および分量について、適切であるかを判断するために、学内外2名に対し予備調査を実施した。その際指摘を受けた文言や質問順等を改訂し、当該授業としては13回目にあたる平成24年1月16日（水）5限⁹の授業時間中に調査を実施した。調査の手順としては、授業開始前に質問紙を対象者

全員に配布し、提出場所を設け同日の授業終了後に回収した。

質問紙の内容は、無記名ではあるが、学部・学年・性別・国籍の他、音楽経験・音楽の嗜好・授業選択の理由等、基本事項について14問、授業前後での音楽嗜好や知識の変化認識について16問、12回目の授業（アフリカの音楽及びヨーロッパの民族音楽、調査日の1回前の授業）及び13回目の授業（ヨーロッパの民族音楽及び北アメリカの音楽、調査日当日に実施した授業）について14問、授業の方向性・「芸術と文化Ⅰ」との関連等について16問の合計60問である。基本事項の質問を除いて、授業に関する質問についてはすべて5段階のSD法を使用した。

調査対象は、芸術と文化Ⅱ受講生のうち、13回目の授業を受講した学生全員とした。本授業の登録者数は226名、質問紙回答数は140件であり、回答率は約66.9%であった。うち1件はほぼ白紙であったため除外し、139件を分析対象とした。内訳は、工学資源学部の学生が75名、教育文化学部の学生が62名、そのうち学校教育課程の学生が21名、地域科学課程の学生が13名、国際言語文化課程の学生が24名、人間環境課程の学生が4名（欠損値2）であった。学校教育課程の学生のうち、音楽を専攻していると回答した学生は5名であった。性別は、女性が53名、男性が86名、学年は1年生が111名、2年生が14名、3年生が9名、4年生が4名（欠損値1）である。（表1参照）

回答者の音楽嗜好について5段階評価で調査したところ、1（とても好き）が80名で約57.6%、2（やや好き）が39名で約28.1%、3（普通）が18名で約12.9%、4（あまり好きではない）が2名で約1.4%、5（嫌い）は0名であった。回答者の約85.7%が音楽を好んでいることがわかる。当該授業の受講理由については、「A.音楽が好きだから」という質問に対し、1（そう思う）と回答した者が57名で約41.0%、2（やや思う）が60名で約43.2%であり、音楽が好きであることが受講理由であるとしている者が全体の約84.2%に当たる。さらに、受講理由を詳細に質問したところ、「B.クラシック音楽に興味があるから」に対して、1（そう思う）と回答した者が40名で約28.8%、2（やや思う）と回答した者が59名で約42.4%であり、約71.2%が選択理由として考えていることがわかった。また、「C.世界の音楽に興味があるから」に対して1（そう思う）と回答した者は38名で約27.3%、2（やや思う）と回答した者

は53名で約38.1%であり、累計で約65.4%であった。このように、受講生の大多数は音楽を好み、クラシック音楽や世界の音楽に関心を持っていることがわかった。ただし、「H.先輩／友人／先生に勧められた」に対し、1（そう思う）、2（ややそう思う）と回答した者は80名で約57.6%、「I.単位が取りやすそう」に対し、1（そう思う）、2（やや思う）と答えた者は89名で約64%、「J（取りやすい時間帯）」に対しては67名、約48.2%が1（そう思う）または2（やや思う）を選択していることから、必ずしも音楽嗜好だけが受講理由ではないことも伺えた。（表2参照）音楽嗜好に対し普通から否定的な選択をした者の多くがH、I、Jで1または2を選択している場合が多い。したがって、必ずしも音楽に興味関心がない学生も一定数含まれていることがわかる。

3. 質問紙調査による西洋音楽嗜好傾向分析

続いて、西洋音楽の嗜好を調査してみると、「15.授業受講前からクラシック音楽を聴いていたか」という質問に対し、1（そう思う）、2（やや思う）の合計は85名であり、約61.2%が西洋音楽を比較的聴いていることが判明した。次に、受講前の知識の有無を質問したところ、受講前からある程度西洋音楽史を知っていたと答えた者（1及び2の選択者）は38名、約27.3%に留まった。日頃西洋音楽を聴く機会あるいは習慣があっても、音楽史を意識的に学ぶ、あるいは知識が身につけているとは考えていないようである。一方受講後に知識が深まったかを聞いたところ、120名、約86.4%が1（そう思う）ないし2（やや思う）と回答した。さらに受講することでクラシック音楽への抵抗感が軽減したかという質問に対しては、99名、約71.2%が1（そう思う）ないし2（やや思う）と回答していた。このことから、受講前には知識として認識できていなかった西洋音楽史を、本授業を受講することで身に付け、さらにそれが抵抗感の軽減につながったと考えている者が7割以上存在していることがわかった。（表3参照）

続いて、上記質問項目の関連性について検討した。まずは以前からの鑑賞（問15、以下項目説明後の括弧内の数字は質問番号）と受講後の知識（17）をクロス集計し、カイ2乗検定を行ったところ、この2つの質問項目は0.1%水準で、関係がないという帰無仮説が棄却された。したがって以前から西洋音楽を聴いていた学生は、受講後の知識の習得感をより強

く感じていることがわかる。(表4参照)

また、受講理由B(クラシックに興味がある)と受講後の知識(17)について同様にクロス集計およびカイ2乗検定を実施したところ、こちらも0.1%水準で帰無仮説が棄却された。西洋音楽に興味を持っている学生は知識の習得感も実感していることがわかる。(表5参照)

次に受講前後での知識の変化をどのように感じたかについて、問16と17をクロス集計によりカイ2乗検定を行ったところ、同様に0.1%水準で帰無仮説が棄却された。すなわち、以前からある程度知識を有していた学生の方が受講後の知識の習得感を感じることができたことがわかる。(表6参照)

受講後の知識(17)とクラシック音楽への抵抗感の軽減(19)についても同様にクロス集計後カイ2乗検定を実施したところ、やはり0.1%水準で帰無仮説が棄却された。このことから、知識の習得感が音楽に対する抵抗感を軽減すると認識していることがわかる。(表7参照)

以上のことから、以前から興味を持ち鑑賞していたり、知識を有していた学生の方が、受講後の知識の習得感を強く感じる傾向があることが判明した。

4. 質問紙調査による世界の諸民族の音楽嗜好傾向分析

世界の諸民族の音楽に対してはどのように考えているかを同様に調査した。受講前からある程度民族音楽を鑑賞していたと回答した者(1及び2)は合計30名約21.6%であり、さらに受講以前の知識について聞いたところ、ある程度知識があると回答した者(1及び2選択者)は29名約20.8%とどちらも回答者全体の2割程度であり、西洋音楽と比較するとかなりなじみが薄いことがわかる。

一方、授業後の知識の習得感について尋ねたところ、1(そう思う)または2(やや思う)と回答した者が118名約84.9%であり64.1ポイントも上昇したことがわかる。さらに抵抗感の軽減について聞いてみると1(そう思う)または2(やや思う)と回答した者は98名約70.5%であり、知識が深まったことで抵抗感が軽減される効果が見られる。

続いて「26. 授業後により広い視野で音楽を認識できるようになったか」という質問を設定したところ、1(そう思う)と回答した者は50名約36.0%、2(やや思う)と回答した者は70名約50.4%で、全体の約

86.4%がより広い視野を持てるようになったと感じていることがわかる。さらに、「27. 授業を受けて以前より音楽が好きになったか」という質問には、1(そう思う)が67名約48.2%、2(やや思う)が51名約36.7%で、全体の約84.9%が知識を身に付けることでより音楽を好きだと感じるようになったことがわかる。(表8参照)

これらを受けて、以前から鑑賞の習慣があること(20)と受講後の知識の習得感(22)をクロス集計し、カイ2乗検定を行ったところ、0.1%水準で帰無仮説が棄却された。(表9参照)また受講理由C(世界の音楽に興味がある)と受講後の知識の習得感(22)について、同様にクロス集計後カイ2乗検定を実施したところ、0.1%水準で帰無仮説が棄却された。(表10参照)このことから、西洋音楽と同様に、以前から興味があり、あるいは鑑賞をしていた学生は、受講による知識の習得感を感じる傾向が強いことがわかる。

次に、受講前後での知識の変化についてクロス集計およびカイ2乗検定を実施したところ、5%水準で帰無仮説が棄却された。(表11参照)多少ばらつきがあるものの、知識を有している方がその習得感も感じられているようである。さらに、受講後の知識の習得感(22)と抵抗感の軽減(24)についてクロス集計後カイ2乗検定を行ったところ、0.1%水準で帰無仮説が棄却された。(表12参照)このことから、知識を深められたと感じるほど、民族音楽への抵抗感が軽減することがわかった。また知識の習得感(22)と以前より音楽が好きになったか(27)についてクロス集計後カイ2乗検定を行ったところ、0.1%水準で帰無仮説が棄却された。(表13参照)

以上のことから、世界の諸民族の音楽に関しても、以前から興味を持ち、鑑賞している、あるいは多少の知識を有している学生は、受講後の知識の習得感をより強く感じ、さらにその音楽が好きになると感じる傾向が強いことが判明した。

5. 西洋音楽史と民族音楽学の相乗効果

以上の分析から、西洋音楽史・民族音楽学への関心は、授業を受け知識を付けることでそれぞれ深められ、さらに関心を持つことができるようになることが判明した。それでは、この2種類の音楽文化を1つの授業で扱うことでどのような効果が得られるのであろうか。

それを分析するために、「45. 授業の前半で西洋クラシックの歴史を学習したことは、後半の民族音楽を学習する上で役に立っていると思いますか」という質問項目を設けた。回答の度数分布は1（そう思う）が37名、約26.6％、2（やや思う）が61名、約43.9％で、約70.5％が多少なりとも役になっていると感じていることがわかった。一方で4（あまり思わない）は4名、約2.9％、5（思わない）は2名、約1.4％で、そう感じられない者は合計しても5％にも満たないことも判明した。（表14参照）

続いて、どのような考えの者がそのような効果を感じているのかを知るために、グループ平均比較を行った。

その結果、受講理由A（音楽が好き）、B（西洋音楽に興味がある）、C（民族音楽に興味がある）と45との関係は、どれも有意確率0.1％未満で帰無仮説が棄却され、相乗効果の感じ方にはグループ間で差があることが判明した。（表15・表16・表17参照）つまり、受講理由で音楽嗜好や興味を強く示した方が、西洋音楽史と民族音楽学の学習における相乗効果の感じ方が強くなるということを示している。それは西洋音楽史、民族音楽学のどちらの関心にも当てはまることから、一方の音楽のみが優勢となるわけではないこともわかる。

続いて、西洋音楽史に関する項目との比較を行ってみると、「16. 受講前から西洋音楽史を知っていた」、「17. 受講後に知識が深まった」、「18. 受講後によりクラシックが好きになった」、「19. クラシックへの抵抗感が軽減した」の全ての項目において、0.1％水準でグループ間に差が見られた。（表18・表19・表20・表21参照）つまり、西洋音楽史の興味関心や知識があることを意識しているほど、西洋音楽史と民族音楽学の学習には相乗効果があると感じているということになる。

一方、民族音楽学関係の質問項目との平均比較を行ってみると、「22. 受講後民族音楽の知識は深まった」、「23. 受講後民族音楽がより好きになった」、「24. 受講後民族音楽への抵抗感が軽減した」の項目において、グループ間に差が見られた。（表22・表23・表24参照）つまり、民族音楽の授業受講後に知識が深まったり、好きになったりし、抵抗感が軽減することを意識しているほど、西洋音楽史と民族音楽学の学習には相乗効果があると感じているということになる。しかし、「21. 受講前から民族音楽につい

ての知識がある」「15. 受講前からクラシック音楽を鑑賞している」「19. 受講前から民族音楽を鑑賞している」の項目については、5％水準でもグループ間に差が見られなかった。（表25・表26・表27参照）ここからは、民族音楽学についての授業を受ける前の状態は、授業を受けた後に西洋音楽史と民族音楽学の相乗効果を感じることにあまり関係はしないということになる。同様に、受講前にクラシック音楽を聴くという習慣は、受講後の西洋音楽史と民族音楽学の相乗効果にはあまり影響がないといえる。つまり、西洋音楽も諸民族の音楽も、鑑賞をしている程度では受講後の知識変化の実感に大きな相違を生じる要因にならないこと、民族については受講前の知識についても同様であるということであり、受講を機に変化するということを表していると考えられる。

同様に、学部や学年、性別によって、そのような感じ方に差が生じるかを分散分析およびt検定（性別）にて検討した。その結果、学部、学年、性別のどれもが5％水準でも帰無仮説が棄却できず、差がないという結果となった。（表28参照）つまり、所属や学年、男女の別によって認識の相違が見られるわけではないこともわかった。

以上のことから、西洋音楽史と民族音楽学の相乗効果を感じることは、学部や学年・性別、ならびに受講前の鑑賞の態度や知識の有無とはあまり大きな関係はなく、受講によって決定される要素が大きいこと、それは諸民族の音楽に関する関心が強い者だけでなく、西洋音楽に関心を持つ者でも感じることで、その関心が強いほど相乗効果を感じやすいということが判明した。

6. 西洋音楽史・民族音楽学・日本音楽史の相乗効果

上記のように、授業によって西洋音楽史と民族音楽学の学習に相乗効果が得られることが判明したため、続いて西洋音楽史・民族音楽学と日本音楽史の相乗効果について検討したい。

筆者は先述の通り、前期に「芸術と文化Ⅰ」という科目において日本音楽史を開講しているため、芸術と文化Ⅱにおいては、日本の音楽について詳しく触れることはしていない。15回目の授業の単元である東アジアの音楽の中で、そこに含まれる地域として日本のアイヌの音楽について紹介する程度であ

る。しかし、本質問紙調査実施回は13回目の授業であるため、また当該授業を実施しておらず、またシラバスには東アジアの音楽文化と記載しているものの、日本（アイヌ）の音楽を紹介することは触れていない。したがって、「芸術と文化Ⅱ」の授業で日本の音楽文化を扱うことについて、質問紙調査段階では学生は知らないはずである。また質問紙調査までに実施した授業の中では日本の音楽についての言及もしておらず、諸民族の音楽と日本の音楽を結合させるような意識付けは教員側からは行っていない。その状態で、「52. この授業を受けて、日本の音楽についても知りたいと思いましたか」「53. 日本の音楽について知っておいた方がよいと思いましたか」「54. 日本の音楽について学習しようと思いましたか」「55. 日本の音楽を学習することは必要だと思いますか」「56. 日本の音楽は世界の音楽の一部だと思いますか」という5項目を用意し、調査した。

52に関しては、1（そう思う）、2（やや思う）と答えた者が106名、約76.3％、53は同様に98名、約70.5％、54は同じく83名、約59.7％、55は1及び2の合計が102名、約73.4％、56は122名、約87.7％であり、54を除いて他は7割から8割の回答率になっている。（表29参照）このことから、あえて日本について授業内で触れていないにもかかわらず、西洋音楽史・民族音楽学の授業を展開することで、8割前後の学生が自発的に日本の音楽について意識するようになっていることがわかる。

これらの項目について、西洋音楽史と民族音楽学の相乗効果（45）との関係を明らかにするためにクロス集計によるカイ2乗検定を実施した。結果としては、全項目が、0.1％水準で帰無仮説を棄却でき、相互に関係があることがわかった。（表30～34参照）つまり、西洋音楽史・民族音楽学の相乗効果を強く感じるほど、日本の音楽への関心や学習意欲を感じやすくなり、かつ日本の音楽も世界の音楽の一部であると認識できるようになるということになる。

最後に、今年度の前期に実施した「芸術と文化Ⅰ」を受講したと回答した学生39名に対し、「60. 芸術と文化Ⅰ（日本の音楽文化）を受講したことは、Ⅱ（世界の音楽文化）の学習に役立っていますか」という質問をしたところ、1（そう思う）、2（やや思う）を選択した者が31名、約79.5％存在した。（表35参照）上記と同様に、その効果を感じる者が8割程度いる

ということは、前期および後期に分割しても、継続して受講した学生にとっては、相互に関連した学習として効果を得られる状態であるということができよう。

7. 結論

以上のことから、本来であれば1科目ずつ開講するのが一般的である音楽の分野の学習を、1つの授業の中で行うことで、受講学生にとっては合わせて考える機会となり、相乗効果を生んでいることが明らかになった。

日本では、義務教育段階および高校の授業の中で音楽を学習する際に、表現・鑑賞・創作の各分野を1年で扱い、かつその内容も西洋・世界の民族・我が国の伝統的音楽を扱うことになっている。本授業は教養科目であり、受講者は8割が1年生である。そのように考えれば、本授業のような学習体制は大学入学前の状態と相似しているということもできる。しかし、大学の授業は、扱う内容が高校時よりはるかに詳細にかつ専門的になっている。また、質問紙において中学校および高校の音楽の授業との関連性を考えているかという点に関する質問を用意したが、中学校・高校ともに1（そう思う）2（やや思う）を選択した者は約24％に留まっており、関連性は強いとは言えなかった。（表36参照）すでに大学入学後半年以上が経過し、大学の授業に慣れてきた学生が、自発的に授業を選択し、専門的な内容を学習することを受け入れた上で、さらに自分自身で発展させて考えることができるようになっている証左であると考ええる。

以上のことから、本授業のように、短期間に内容を凝縮する形であっても、西洋音楽史と民族音楽学を1つの授業の中で両立させることは不可能ではなく、かつ、それによる学生自身の応用力という点で相乗効果を見ることができ、有効であると結論づけることができた。ただし、この調査は平成24年度の学生に対して行ったものであり、他年度でも同様の結果が出るのか、あるいは他大学でも同様の傾向を示すのかを検討すべきである。機会があれば同様の調査を継続して実施し、この結果が一般化できるのかを検討してみたい。

¹ 秋田大学教養基礎教育の目的・主題別科目

² 一般的な学問分野としての西洋音楽史を指してお

り、いわゆるクラシック音楽史である。学生には西洋音楽史とも称しているが、質問紙では理解しやすいようにクラシックという用語を用いた。以後、質問紙の項目説明においては使用した「クラシック（音楽）」を、それ以外の説明の部分では西洋音楽（史）を用いる。

³ 学問上では民族音楽学と民族音楽は異なるが、ここでは、民族音楽学入門という意味で民族音楽学という語を用いている。以後、諸民族の音楽を指す場合には民族音楽、学問体系を指す場合には民族音楽学と表記する。

⁴ HP等、Web上で閲覧・検索できるシラバスを調査した範囲では、平成25年1月段階では国立大学ではこのような構成の授業は管見に入らなかった。

⁵ いわゆる伝統音楽としての日本音楽史であり、民謡等は基本的に扱っていない。

⁶ 西江秀三 1998「音楽を語るなどとは～教養教育としての音楽～」『秋田大学総合基礎教育研究紀要』第5集 pp.19-26

⁷ 西江秀三 1999「モーツァルトなんて言っちゃって～教養教育としての音楽（2）～」『秋田大学教養基礎教育研究年報』pp.109-120

⁸ 小島千か 2011「大学の教養教育における「音楽」と「美術」の連携－音楽の視覚化を中心に－」『音楽教育実践ジャーナル』8（2）pp.62-69

⁹ 本学では5限は16：10から17：40までである。

Summary

This is a study that it was examined the synergistic effect of the history of Western music, ethnomusicology, and how it would influence study of the history of the Japanese music.

I am teaching the “art and culture I” and the “art and culture II” in liberal arts education. The contents of the art and culture I is the history of Japanese music, and the art and culture II is the history of Western music, and ethnomusicology. I have set up so that students can be learned in an all year. It is rare to treat a history of Western music and ethnomusicology by one lesson. So I analyzed the effect a statistical analysis of questionnaire survey.

As a result, it was revealed that a student produced a synergistic effect by learning the history of Western music and ethnomusicology in one unit. Further study revealed that they come to interested in the Japanese music history by learning these two kinds of music.

Keywords : liberal arts education, the history of Western music, ethnomusicology, the history of Japanese music

(Received February 15, 2013)

表1. 調査対象概要

学部	度数	パーセント	性別	度数	パーセント
工学資源	75	54.0	女性	53	38.1
教育（学校教育）	21	15.1	男性	86	61.9
教育（地域科学）	13	9.4	合計	139	100.0
教育（国際言語文化）	24	17.3	学年	度数	パーセント
教育（人間環境）	4	2.9	1	111	79.9
欠損値	2	1.4	2	14	10.1
合計	139	100.0	3	9	6.5
教科（学校教育）	度数	パーセント	4	4	2.9
国語	3	14.3	欠損値	1	.7
社会	3	14.3	合計	139	100.0
音楽	5	23.8			
その他	3	14.3			
欠損値	7	33.3			
合計	21	100.0			

表2. 音楽嗜好・受講理由

音楽の嗜好	度数	パーセント	受講理由C （世界の音楽に興味がある）	度数	パーセント
1. とても好き	80	57.6	1. そう思う	38	27.3
2. やや好き	39	28.1	2. やや思う	53	38.1
3. 普通	18	12.9	3. どちらでもない	34	24.5
4. あまり好きではない	2	1.4	4. あまり思わない	10	7.2
5. 嫌い	0	.0	5. 思わない	4	2.9
合計	139	100.0	合計	139	100.0
受講理由A（音楽が好き）	度数	パーセント	受講理由H （先輩/友人/先生に勧められた）	度数	パーセント
1. そう思う	57	41.0	1. そう思う	46	33.1
2. やや思う	60	43.2	2. やや思う	34	24.5
3. どちらでもない	11	7.9	3. どちらでもない	23	16.5
4. あまり思わない	9	6.5	4. あまり思わない	5	3.6
5. 思わない	2	1.4	5. 思わない	31	22.3
合計	139	100.0	合計	139	100.0
受講理由B （クラシック音楽に興味がある）	度数	パーセント	受講理由J （取りやすい時間帯だった）	度数	パーセント
1. そう思う	40	28.8	1. そう思う	35	25.2
2. やや思う	59	42.4	2. やや思う	32	23.0
3. どちらでもない	22	15.8	3. どちらでもない	15	10.8
4. あまり思わない	13	9.4	4. あまり思わない	27	19.4
5. 思わない	5	3.6	5. 思わない	30	21.6
合計	139	100.0	合計	139	100.0

表3. 西洋音楽史嗜好調査

受講以前からクラシックを 聴いていたか	度数	パーセント	受講後に西洋音楽史の知識 は深まったか	度数	パーセント
1. そう思う	49	35.3	1. そう思う	35	25.2
2. やや思う	36	25.9	2. やや思う	85	61.2
3. どちらでもない	10	7.2	3. どちらでもない	13	9.4
4. あまり思わない	24	17.3	4. あまり思わない	3	2.2
5. 思わない	20	14.4	5. 思わない	3	2.2
合計	139	100.0	合計	139	100.0
受講以前から西洋音楽に対 する知識はあったか	度数	パーセント	クラシック音楽への抵抗感 は軽減したか	度数	パーセント
1. そう思う	5	3.6	1. そう思う	42	30.2
2. やや思う	33	23.7	2. やや思う	57	41.0
3. どちらでもない	15	10.8	3. どちらでもない	31	22.3
4. あまり思わない	36	25.9	4. あまり思わない	3	2.2
5. 思わない	50	36.0	5. 思わない	6	4.3
合計	139	100.0	合計	139	100.0

表4 15クラシック鑑賞習慣 と 17受講後の西洋音楽史の知識のクロス表およびカイ2乗検定

15クラシック鑑賞習慣	17受講後の西洋音楽史の知識					合計
	1そう思う	2やや思う	3どちらでもない	4あまり思わない	5思わない	
1そう思う	21	25	3	0	0	49
2やや思う	11	23	1	1	0	36
3どちらでもない	1	5	4	0	0	10
4あまり思わない	1	18	3	2	0	24
5思わない	1	14	2	0	3	20
合計	35	85	13	3	3	139
Pearson のカイ 2 乗		値	自由度	有意確率 (両側)		
		53.307 ^a	16	.000		

表5 受講理由B (クラシックに興味がある) と 17受講後の西洋音楽史の知識のクロス表およびカイ2乗検定

受講理由B	17受講後の西洋音楽史の知識					合計
	1そう思う	2やや思う	3どちらでもない	4あまり思わない	5思わない	
1そう思う	21	18	1	0	0	40
2やや思う	13	43	2	0	1	59
3どちらでもない	1	13	7	0	1	22
4あまり思わない	0	8	3	2	0	13
5思わない	0	3	0	1	1	5
合計	35	85	13	3	3	139
Pearson のカイ 2 乗		値	自由度	有意確率 (両側)		
		72.282 ^a	16	.000		

表6 16受講前の西洋音楽史の知識 と 17受講後の西洋音楽史の知識 のクロス表およびカイ2乗検定

16受講前の西洋音楽史の知識	17受講後の西洋音楽史の知識					合計
	1そう思う	2やや思う	3どちらでもない	4あまり思わない	5思わない	
1そう思う	4	1	0	0	0	5
2やや思う	18	14	1	0	0	33
3どちらでもない	3	8	4	0	0	15
4あまり思わない	7	24	3	2	0	36
5思わない	3	38	5	1	3	50
合計	35	85	13	3	3	139
Pearson のカイ 2 乗		値	自由度	有意確率 (両側)		
		45.776 ^a	16	.000		

表7 19クラシックへの抵抗感 と 17受講後の西洋音楽史の知識 のクロス表およびカイ2乗検定

19クラシックへの抵抗感	17受講後の西洋音楽史の知識					合計
	1そう思う	2やや思う	3どちらでもない	4あまり思わない	5思わない	
1そう思う	21	17	2	1	1	42
2やや思う	9	39	8	1	0	57
3どちらでもない	3	24	3	1	0	31
4あまり思わない	1	2	0	0	0	3
5思わない	1	3	0	0	2	6
合計	35	85	13	3	3	139
Pearson のカイ 2 乗		値	自由度	有意確率 (両側)		
		52.920 ^a	16	.000		

表8. 民族音楽嗜好調査

民族音楽鑑賞習慣			民族音楽に関する抵抗感の変化			民族音楽に関する受講前の知識		
	度数	パーセント		度数	パーセント		度数	パーセント
1. そう思う	11	7.9	1. そう思う	33	23.7	1. そう思う	6	4.3
2. やや思う	19	13.7	2. やや思う	65	46.8	2. やや思う	23	16.5
3. どちらでもない	11	7.9	3. どちらでもない	32	23.0	3. どちらでもない	17	12.2
4. あまり思わない	36	25.9	4. あまり思わない	2	1.4	4. あまり思わない	46	33.1
5. 思わない	62	44.6	5. 思わない	7	5.0	5. 思わない	47	33.8
合計	139	100.0	合計	139	100.0	合計	139	100.0
授業後に広い視野で音楽を認識できる			民族音楽に関する受講後の知識			授業を受けて民族音楽が好きになった		
	度数	パーセント		度数	パーセント		度数	パーセント
1. そう思う	50	36.0	1. そう思う	27	19.4	1. そう思う	67	48.2
2. やや思う	70	50.4	2. やや思う	91	65.5	2. やや思う	51	36.7
3. どちらでもない	15	10.8	3. どちらでもない	13	9.4	3. どちらでもない	17	12.2
4. あまり思わない	2	1.4	4. あまり思わない	4	2.9	4. あまり思わない	2	1.4
5. 思わない	2	1.4	5. 思わない	4	2.9	5. 思わない	2	1.4
合計	139	100.0	合計	139	100.0	合計	139	100.0

表9 20民族音楽鑑賞習慣 と 22授業後の民族音楽知識習得感 のクロス表およびカイ2乗検定

20民族音楽鑑賞習慣	22授業後の民族音楽知識習得感					合計
	1そう思う	2やや思う	3どちらでもない	4あまり思わない	5思わない	
1そう思う	7	4	0	0	0	11
2やや思う	6	13	0	0	0	19
3どちらでもない	4	5	2	0	0	11
4あまり思わない	5	23	7	1	0	36
5思わない	5	46	4	3	4	62
合計	27	91	13	4	4	139
	値	自由度	有意確率 (両側)			
Pearson のカイ 2 乗	49.689 ^a	16	.000			

表10 受講理由C (民族音楽への興味) と 22授業後の民族音楽知識習得感 のクロス表およびカイ2乗検定

受講理由C(世界の音楽への興味)	22授業後の民族音楽知識習得感					合計
	1そう思う	2やや思う	3どちらでもない	4あまり思わない	5思わない	
1そう思う	17	21	0	0	0	38
2やや思う	8	39	5	1	0	53
3どちらでもない	1	22	7	3	1	34
4あまり思わない	1	6	1	0	2	10
5思わない	0	3	0	0	1	4
合計	27	91	13	4	4	139
	値	自由度	有意確率 (両側)			
Pearson のカイ 2 乗	54.264 ^a	16	.000			

表11 21授業前の民族音楽知識 と 22授業後の民族音楽知識習得感 のクロス表およびカイ2乗検定

21授業前の民族音楽知識	22授業後の民族音楽知識習得感					合計
	1そう思う	2やや思う	3どちらでもない	4あまり思わない	5思わない	
1そう思う	3	3	0	0	0	6
2やや思う	9	14	0	0	0	23
3どちらでもない	4	11	2	0	0	17
4あまり思わない	7	30	8	1	0	46
5思わない	4	33	3	3	4	47
合計	27	91	13	4	4	139
	値	自由度	有意確率 (両側)			
Pearson のカイ 2 乗	29.071 ^a	16	.023			

表12 24民族音楽に対する抵抗感 と 22授業後の民族音楽知識習得感 のクロス表およびカイ2乗検定

24民族音楽に対する抵抗感	22民族音楽知識後					合計
	1そう思う	2やや思う	3どちらでもない	4あまり思わない	5思わない	
1そう思う	18	13	2	0	0	33
2やや思う	8	51	3	3	0	65
3どちらでもない	1	23	8	0	0	32
4あまり思わない	0	2	0	0	0	2
5思わない	0	2	0	1	4	7
合計	27	91	13	4	4	139
	値	自由度	有意確率 (両側)			
Pearson のカイ 2 乗	128.265 ^a	16	.000			

表13 22授業後の民族音楽知識習得感 と 27以前より好きになった のクロス表およびカイ2乗検定

22授業後の民族音楽知識習得感	27以前より好きになった					合計
	1そう思う	2やや思う	3どちらでもない	4あまり思わない	5思わない	
1そう思う	21	5	0	1	0	27
2やや思う	42	36	12	1	0	91
3どちらでもない	2	8	3	0	0	13
4あまり思わない	1	2	1	0	0	4
5思わない	1	0	1	0	2	4
合計	67	51	17	2	2	139
	値	自由度	有意確率 (両側)			
Pearson のカイ 2 乗	89.785 ^a	16	.000			

表14. 45西洋音楽史の学習は民族音楽の学習に役立つ

	度数	パーセント
1そう思う	37	26.6
2やや思う	61	43.9
3どちらでもない	35	25.2
4あまり思わない	4	2.9
5思わない	2	1.4
合計	139	100.0

表15 45西洋音楽史の学習が民族音楽学の学習に役立つ と受講理由A
(音楽が好き) のグループ平均と分散分析

受講理由A（音楽が好き）	平均値	度数	標準偏差
1そう思う	1.75	57	.786
2やや思う	2.28	60	.846
3どちらでもない	2.18	11	.751
4あまり思わない	2.44	9	.726
5思わない	3.50	2	2.121
合計	2.09	139	.872

45×受講理由A 分散分析表	平方和	自由度	平均平方	F値	有意確率
グループ間	13.861	4	3.465	5.097	.001
グループ内	91.103	134	.680		
合計	104.964	138			

表16 45西洋音楽史の学習が民族音楽学の学習に役立つ と受講理由B
(西洋音楽に興味がある) のグループ平均と分散分析

西洋音楽に興味があるグループ平均と分散分析表					
受講理由B (西洋音楽に興味がある)	平均値	度数	標準偏差		
1そう思う	1.70	40	.758		
2やや思う	2.07	59	.888		
3どちらでもない	2.45	22	.671		
4あまり思わない	2.38	13	.650		
5思わない	3.00	5	1.414		
合計	2.09	139	.872		
45×受講理由B 分散分析表					
	平方和	自由度	平均平方	F値	有意確率
グループ間	14.304	4	3.576	5.285	.001
グループ内	90.660	134	.677		
合計	104.964	138			

表17 45西洋音楽史の学習が民族音楽学の学習に役立つ と受講理由C
(民族音楽に興味がある) のグループ平均と分散分析

受講理由C (民族音楽に興味がある)		平均値		度数		標準偏差	
1そう思う		1.68	38			.933	
2やや思う		2.08	53			.730	
3どちらでもない		2.44	34			.786	
4あまり思わない		2.20	10			.789	
5思わない		2.75	4			1.500	
合計		2.09	139			.872	
45×受講理由C 分散分析表							
		平方和	自由度	平均平方	F値	有意確率	
グループ間		12.323	4	3.081	4.456	.002	
グループ内		92.641	134	.691			
合計		104.964	138				

表18 45西洋音楽史の学習が民族音楽学の学習に役立つ と16 受講前
の西洋音楽史知識 のグループ平均と分散分析

西洋音楽史知識のグループ間平均と分散分析						
16受講前から西洋音楽史を知っていた		平均値	度数	標準偏差		
1そう思う		1.40	5	.548		
2やや思う		1.73	33	.876		
3どちらでもない		2.13	15	.834		
4あまり思わない		2.08	36	.692		
5思わない		2.38	50	.923		
合計		2.09	139	.872		
45×16 分散分析表						
		平方和	自由度	平均平方	F値	有意確率
グループ内		10.955	4	2.739	3.904	.005
グループ間		94.009	134	.702		
合計		104.964	138			

表19 45西洋音楽史の学習が民族音楽学の学習に役立つ と17 受講後
に西洋音楽の知識が深まった のグループ平均と分散分析

西洋音楽の知識が深まったにグループ平均と分散分析					
17受講後に西洋音楽の知識が深まった	平均値	度数	標準偏差		
1そう思う	1.51	35	.781		
2やや思う	2.22	85	.746		
3どちらでもない	2.31	13	.751		
4あまり思わない	2.00	3	.000		
5思わない	4.00	3	1.732		
合計	2.09	139	.872		
45×17 分散分析表					
	平方和	自由度	平均平方	F値	有意確率
グループ間	24.699	4	6.175	10.309	.000
グループ内	80.265	134	.599		
合計	104.964	138			

表20 45西洋音楽史の学習が民族音楽学の学習に役立つ と18 受講後
にクラシックがより好きになった のグループ平均と分散分析

クラシックがより好きになった のグループ平均と分散分析					
18クラシックがより好きになった	平均値	度数	標準偏差		
1そう思う	1.64	50	.827		
2やや思う	2.25	63	.761		
3どちらでもない	2.35	17	.606		
4あまり思わない	2.57	7	.976		
5思わない	5.00	1	.		
合計	2.08	138	.872		
45×18 分散分析表					
	平方和	自由度	平均平方	F値	有意確率
グループ間	23.070	4	5.768	9.464	.000
グループ内	81.053	133	.609		
合計	104.123	137			

表21 45西洋音楽史の学習が民族音楽学の学習に役立つ と19 クラ
シックへの抵抗感が軽減した のグループ平均と分散分析

シグマへの抵抗感が軽減したのグループ平均と分散分析					
19クラシックへの抵抗感が軽減した	平均値	度数	標準偏差		
1そう思う	1.86	42	.899		
2やや思う	2.04	57	.778		
3どちらでもない	2.26	31	.682		
4あまり思わない	2.00	3	1.000		
5思わない	3.33	6	1.366		
合計	2.09	139	.872		
45×19 分散分析表					
	平方和	自由度	平均平方	F値	有意確率
グループ間	12.623	4	3.156	4.579	.002
グループ内	92.341	134	.689		
合計	104.964	138			

表22 45西洋音楽史の学習が民族音楽学の学習に役立つ と22 受講後
に民族音楽の知識が深まった のグループ平均と分散分析

民族音楽の知識が深まった のグループ平均と分散分析					
22受講後に民族音楽の知識が深まった	平均値	度数	標準偏差		
1そう思う	1.59	27	.797		
2やや思う	2.14	91	.811		
3どちらでもない	2.23	13	.725		
4あまり思わない	2.75	4	.500		
5思わない	3.00	4	1.826		
合計	2.09	139	.872		
45×22 分散分析表	平方和	自由度	平均平方	F値	有意確率
グループ間	12.245	4	3.061	4.424	.002
グループ内	92.719	134	.692		
合計	104.964	138			

表23 45西洋音楽史の学習が民族音楽学の学習に役立つ と23 民族音
楽がより好きになった のグループ平均と分散分析

23民族音楽がより好きになった					
	平均値	度数	標準偏差		
1そう思う	1.74	31	.965		
2やや思う	1.98	59	.754		
3どちらでもない	2.22	36	.637		
4あまり思わない	2.75	8	1.035		
5思わない	3.50	4	1.291		
合計	2.08	138	.872		
45×23 分散分析表					
	平方和	自由度	平均平方	F値	有意確率
グループ間	16.482	4	4.121	6.253	.000
グループ内	87.641	133	.659		
合計	104.123	137			

表24 45西洋音楽史の学習が民族音楽学の学習に役立つ と24 民族音
楽への抵抗感が軽減した のグループ平均と分散分析

楽への抵抗感が軽減したのグループ平均と分散分析					
24民族音楽への抵抗感が軽減した	平均値	度数	標準偏差		
1そう思う	1.88	33	.893		
2やや思う	1.97	65	.728		
3どちらでもない	2.25	32	.672		
4あまり思わない	3.50	2	.707		
5思わない	3.00	7	1.732		
合計	2.09	139	.872		
45×24 分散分析表					
	平方和	自由度	平均平方	F値	有意確率
グループ間	13.010	4	3.253	4.740	.001
グループ内	91.954	134	.686		
合計	104.964	138			

表25 45西洋音楽史の学習が民族音楽学の学習に役立つ と23 受講前から民族音楽の知識がある のグループ平均と分散分析

21受講前から民族音楽の知識がある	平均値	度数	標準偏差		
1そう思う	2.33	6	1.633		
2やや思う	1.83	23	.717		
3どちらでもない	2.06	17	.827		
4あまり思わない	2.02	46	.774		
5思わない	2.26	47	.920		
合計	2.09	139	.872		
45×21 分散分析表	平方和	自由度	平均平方	F値	有意確率
グループ間	3.471	4	.868	1.146	.338
グループ内	101.493	134	.757		
合計	104.964	138			

表26 45西洋音楽史の学習が民族音楽学の学習に役立つ と15 受講前からクラシック音楽を鑑賞している のグループ平均と分散分析

15クラシック鑑賞習慣	平均値	度数	標準偏差		
1そう思う	1.94	49	.876		
2やや思う	2.03	36	.845		
3どちらでもない	1.80	10	.632		
4あまり思わない	2.25	24	.794		
5思わない	2.50	20	1.000		
合計	2.09	139	.872		
45×15 分散分析表	平方和	自由度	平均平方	F値	有意確率
グループ間	6.075	4	1.519	2.058	.090
グループ内	98.889	134	.738		
合計	104.964	138			

表27 45西洋音楽史の学習が民族音楽学の学習に役立つ と19 受講前から民族音楽を鑑賞している のグループ平均と分散分析

20民族音楽鑑賞習慣	平均値	度数	標準偏差		
1そう思う	2.00	11	1.342		
2やや思う	1.74	19	.733		
3どちらでもない	2.09	11	.831		
4あまり思わない	2.03	36	.736		
5思わない	2.24	62	.881		
合計	2.09	139	.872		
45×20 分散分析表	平方和	自由度	平均平方	F値	有意確率
グループ間	4.028	4	1.007	1.337	.260
グループ内	100.936	134	.753		
合計	104.964	138			

表28 45西洋音楽史の学習が民族音楽学の学習に役立つ と学部・学年・性別の分散分析 /t検定

45×学部 分散分析表	平方和	自由度	平均平方	F値	有意確率
グループ間	2.776	4	.694	.904	.464
グループ内	101.340	132	.768		
合計	104.117	136			
45×学年 分散分析表	平方和	自由度	平均平方	F値	有意確率
グループ間	.912	3	.304	.391	.759
グループ内	104.045	134	.776		
合計	104.957	137			
45×性別 t検定		Levene の検定		2つの母平均の差の検定	
		F 値	有意確率	t 値	有意確率 (両側)
等分散を仮定する		.735	.393	-2.356	.020

表29 日本音楽への意識

52授業を受けて日本音楽を知りたいと思うようになった			53日本音楽を知っておいた方がよいと思う			54日本音楽を学習しようと思う		
	度数	パーセント		度数	パーセント		度数	パーセント
1そう思う	46	33.1	1そう思う	50	36.0	1そう思う	29	20.9
2やや思う	60	43.2	2やや思う	48	34.5	2やや思う	54	38.8
3どちらでもない	23	16.5	3どちらでもない	32	23.0	3どちらでもない	37	26.6
4あまり思わない	8	5.8	4あまり思わない	8	5.8	4あまり思わない	16	11.5
5思わない	2	1.4	5思わない	1	.7	5思わない	3	2.2
合計	139	100.0	合計	139	100.0	合計	139	100.0
55日本音楽を学習することは必要			56日本音楽は世界の音楽の一部だと思う					
	度数	パーセント		度数	パーセント			
1そう思う	46	33.1	1そう思う	74	53.2			
2やや思う	56	40.3	2やや思う	48	34.5			
3どちらでもない	24	17.3	3どちらでもない	12	8.6			
4あまり思わない	9	6.5	4あまり思わない	3	2.2			
5思わない	4	2.9	5思わない	1	.7			
合計	139	100.0	欠損値	1	.7			
			合計	139	100.0			

表30 52 日本音楽を知りたいと思う×45 西洋音楽史の学習が民族音楽学の学習に役立つ のクロス集計およびカイ2乗検定

52 日本音楽を知りたいと思う	45西洋音楽史の学習が民族音楽学の学習に役立つ					合計
	1そう思う	2やや思う	3どちらでもない	4あまり思わない	5思わない	
1そう思う	24	16	5	0	1	46
2やや思う	9	31	18	2	0	60
3どちらでもない	4	8	11	0	0	23
4あまり思わない	0	5	1	2	0	8
5思わない	0	1	0	0	1	2
合計	37	61	35	4	2	139
	値	自由度	有意確率 (両側)			
Pearson のカイ 2 乗	80.452 ^a	16	.000			

表31 53 日本音楽を知っておいた方がよいと思う×45 西洋音楽史の学習が民族音楽学の学習に役立つ
のクロス集計およびカイ2乗検定

53 日本音楽を知って おいた方がよいと思う	45西洋音楽史の学習が民族音楽学の学習に役立つ					合計
	1そう思う	2やや思う	3どちらでもない	4あまり思わない	5思わない	
1そう思う	25	19	4	1	1	50
2やや思う	10	20	16	2	0	48
3どちらでもない	2	19	11	0	0	32
4あまり思わない	0	3	4	1	0	8
5思わない	0	0	0	0	1	1
合計	37	61	35	4	2	139
	値	自由度	有意確率（両側）			
Pearson のカイ 2 乗	104.203 ^a	16	.000			

表32 54 日本音楽を学習しようと思う×45 西洋音楽史の学習が民族音楽学の学習に役立つ
のクロス集計およびカイ2乗検定

54 日本音楽を学習し ようと思う	45西洋音楽史の学習が民族音楽学の学習に役立つ					合計
	1そう思う	2やや思う	3どちらでもない	4あまり思わない	5思わない	
1そう思う	15	12	1	0	1	29
2やや思う	18	21	14	1	0	54
3どちらでもない	3	22	11	1	0	37
4あまり思わない	1	6	7	2	0	16
5思わない	0	0	2	0	1	3
合計	37	61	35	4	2	139
	値	自由度	有意確率（両側）			
Pearson のカイ 2 乗	59.526 ^a	16	.000			

表33 55 日本音楽の学習は必要だと思う×45 西洋音楽史の学習が民族音楽学の学習に役立つ
のクロス集計およびカイ2乗検定

55 日本音楽の学習は必 要だと思う	45西洋音楽史の学習が民族音楽学の学習に役立つ					合計
	1そう思う	2やや思う	3どちらでもない	4あまり思わない	5思わない	
1そう思う	24	15	5	1	1	46
2やや思う	11	28	16	1	0	56
3どちらでもない	2	12	9	1	0	24
4あまり思わない	0	5	3	1	0	9
5思わない	0	1	2	0	1	4
合計	37	61	35	4	2	139
	値	自由度	有意確率（両側）			
Pearson のカイ 2 乗	47.634 ^a	16	.000			

表34 56 日本音楽は世界の音楽の一部だと思う×45 西洋音楽史の学習が民族音楽学の学習に役立つ
のクロス集計およびカイ2乗検定

56 日本音楽は世界の音 楽の一部だと思う	45西洋音楽史の学習が民族音楽学の学習に役立つ					合計
	1そう思う	2やや思う	3どちらでもない	4あまり思わない	5思わない	
1そう思う	27	30	13	3	1	74
2やや思う	6	24	18	0	0	48
3どちらでもない	3	6	3	0	0	12
4あまり思わない	0	1	1	1	0	3
5思わない	0	0	0	0	1	1
合計	36	61	35	4	2	138
	値	自由度	有意確率（両側）			
Pearson のカイ 2 乗	93.235 ^a	16	.000			

表35 60 I→II学習の役立ち		
	度数	パーセント
1そう思う	11	28.2
2やや思う	20	51.3
3どちらでもない	5	12.8
4あまり思わない	3	7.7
5思わない	0	0
合計	39	100.0

表36 中学・高校の学習との関連

受講理由K(中学で世界の音楽を学習し興味を持った) 受講理由L(高校で世界の音楽を学習し興味を持った)

	度数	パーセント
1そう思う	10	7.2
2やや思う	24	17.3
3どちらでもない	37	26.6
4あまり思わない	32	23.0
5思わない	36	25.9
合計	139	100.0

	度数	パーセント
1そう思う	13	9.4
2やや思う	19	13.7
3どちらでもない	30	21.6
4あまり思わない	21	15.1
5思わない	56	40.3
合計	139	100.0